2011年（平成23年）
第39号
（3月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

被災者へ届け！　市民の真心　～東日本大震災・緊急街頭募金を実施～

３月１３日（日）、京都市中京区寺町三条において、本会青年部が東日本大震災に対する、緊急街頭募金に立った。その前日、テレビなどで悲惨な映像を目にした女子高校生の一人の「自分たちにできることはないか」という思いから実施に至った。警察には土日は道路使用許可を受け付けられないと断られた。しかし、以前「花まつり」に協力していただいた『寺町京極商店街振興組合』に話を持ちかけると、快諾されて実施できる運びとなった。

通りを行く市民の関心は高く、６０万円を超える真心からの募金が集まった。この募金は赤十字を通じて、現地に届けられる。

多くの市民が募金に協力

今年度の《アフリカへ毛布をおくる運動》キャンペーン　来月スタート

今年も４月１日から５月 31 日まで、京都教会及び各支部において「アフリカへ毛布をおくる運動」を展開する。同運動は AMDA 社会開発機構、JHP・学校をつくる会、日本国際ボランティアセンター、立正佼成会により構成された実行委員会が、外務省、国際連合世界食糧計画 WFP 協会、国連難民高等弁務官駐日事務所、明るい社会づくり運動の後援と、日本通運株式会社に協力を得て実施される。

日中は 30 度を超える炎天ながらも、朝晩は３度くらいという温度差の激しい地帯に住んでいる人びとにとって、毛布は、寝具であり、日除けであり、じゅうたんであり、コートであり、産着であり、日々の生活に欠かせない必需品だ。アフリカの人びとのニーズに応えるため、市民のみなさまから毛布を提供していただき、届けようというものだ。

参加方法は、まず「毛布の提供」がある。提供された毛布を現地の人々の手に渡るまで１枚 1,000 円かかるため、その海外輸送協力金も併せて協力していただく。また、毛布に縫い付ける「メッセージ」も依頼している。もうひとつ「海外輸送協力金のみの提供」もある。毛布が手元にない人でも参加できる方法だ。

1984 年に呼びかけられて始まった同運動で、「20 年以上も同じ毛布を使うことはできないので、常に新しい毛布が必要だ。毛布だけでなく『真心』を送りたい。その心が世界の平和につながることを祈りたい」（京都教会実行委員）と今年も幅広く協力を呼びかける。

（詳しくは、公式サイト「http://www.mofu.org/」へ）

お知らせ（４月の教会行事）

４月	１日（金）	朔日参り	9：00～
	３日（日）	花まつり	9：00～
	４日（月）	開祖さまご命日	（各地区）
	８日（金）	降誕会	9：00～
	１０日（日）	脇祖さまご命日	9：00～
		「研修の日」	
	１５日（金）	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～

時事刻々

このたびの東日本大震災では、関東大震災以来という多くの犠牲者を出す大惨事になった。犠牲となられた方のご冥福を祈り、行方不明の方の無事を願うものである。

十一日の地震発生以来、テレビの報道から、日を追うにつれて被害の甚大さが明らかになっている。それと共に、支援の輪が広がっている。国内だけでなく海外からも続々と支援の手が差し伸べられている。

その一方で、ツイッターやチェーンメールで、デマ情報が流れている。まさに、現在は玉石混交の情報氾濫時代である。デマを流すのはもっての他だが、情報の真価を見分けられるようになる必要がある。

今、被災者の方々のご健康と、被災地の一日も早い復旧・復興が望まれる。そのためには、不自由な生活を強いられている方々を思い、日本国民が一丸となって支援することが大切だ。

教団創立７３周年記念と

会長位法燈継承２０年　二重の慶事

３月５日（土）、教団創立７３周年記念式典が本部大聖堂で執り行われた。その模様は衛星中継で各教会に放映された。今年は会長位法燈継承後２０年という節目にあたる式典となった。また、京都教会から功労者表彰を受けた二人の会員が大聖堂の式典に列席した。

同式典で、祝辞を述べた華厳宗管長東大寺第２２０世別当・北河原公敬猊下はアームズダウンキャンペーンの目標達成を称賛し、本会の教えは異なる宗教や宗教を持たない人とも仲良くでき、会員は謙虚で誠実で精励な方ばかりであると称賛された。

衛星中継後、中村教会長は創立の日に掲げる御旗の意義を説明。アームズダウンへの取り組みに謝意を述べた。

また、会員に対して「肯定的な言葉を多く使う」「尊ぶことをせず否定することも五戒を冒す」「みんな仲良く手をたずさえ支えあうには欠点を見ていては出来ない」と今後の精進のあり方を強調した。

都大路を駆け抜ける！全国車いす駅伝競走大会

運営ボランティアに青年部が参加

２月１９日（土）、２０日（日）と本会青年部３４名が「第２２回全国車いす駅伝競争大会」の運営ボランティアに参加した。主に選手の移動に対する介助という力仕事を担当した。今回は初参加が多く、ボランティア志望者が着実に広がっている。今回、初めて運営主任を務めた青年部リーダーは「皆様のお陰様でこのお役が出来てるのだと、つくづく思わせて頂きました」と感想を述べていた。

和やかな定例議員懇話会開催

２月２５日（金）朝７時、京都教会において「京都佼成議員懇話会（早起き会）」が開催された。植田喜裕幹事長をはじめ、府議会議員、市議会議員ら２２名が参加した。冒頭、植田幹事長より沖縄慰霊供養と戦争の語り部との出会いやについての報告があり、続いて、参加議員の代表５名から近況報告があった。

その後、京都教会の支部長、スタッフらと和やかに朝食を取りながら歓談し、散会となった。

「共生社会と宗教を考えるフォーラム」

３月６日（日）、同志社大学において、ＮＰＯ法人きょうと、ＮＰＯ浄土宗、同志社大学主催の宗教における社会貢献をテーマとしたフォーラムが開催された。既成伝統教団・新宗教・市民・学生８０人が共に学んだこのフォーラムでは様々な分野の宗教者が事例発表やパネルディスカッション等を行い、現代宗教者の社会との共生（ともいき）、社会貢献のあり方を熱心に議論しあった。利他行の実践こそ、宗教者の本質であること、対社会にその尊さを伝えていくこと、また宗教間の垣根を越えて、共に平和実現を目指すことが求められているとの発表があった。

「継続は力」の地区清掃活動　～右京明社～

右京明社では平成２０年８月から毎月末の日曜日に右京区内の４拠点（花園、常盤、西院、広沢）を中心に、地域に密着した清掃奉仕活動を推進している。毎回各拠点には４～５名の参加者が約１時間ゴミ拾いを行っている。最近は子供さんやお孫さんも参加し、ネットワークが広がりつつある。

集められたゴミは「京都市まち美化ボランティア」指定の無料ゴミ袋にまとめて出されている。

「継続は力なり」ますます輪が広がりそうだ。

●毛穴からもご法は入る

（佼成会のことば）

『方便品』に「仏種は縁に従って起る」と説かれています。たとえば、道場にきてあまり熱心に法を聴こうとせず、法座にも座ろうとしない人がいたとします。しかし、佼成会では、そういう人に対しても「その人にとって、道場にきたことは決して無駄ではない。毛穴からもご法は入っているのだから」という言い方をしてきました。仏教に「薫習」という言葉があります。これはお香が本人も気づかぬうちに衣類や体に染み込むように、あるものが習慣的に働きかけることによって、知らず知らずのうちに他に影響を及ぼしていくことをいいます。ですから、法の縁に触れると、多少は逆らっていた人も道場の空気を体全体で感じ取り、無意識のうちに心が清浄になって仏さまの教えが心に浸透し、やがては法のレールにも乗っていくのだということをいっているのです。まさに僧伽の中にいる功徳といえます。このように「毛穴からもご法は入る」という譬えは、理屈や言葉ではなく宗教的な雰囲気が何よりも大切であることを言い表しています。

今月の言葉　～ 一日一笑 ～　京都教会長・中村憲一郎

「一日は一生の縮図」、「一日一生」などと言われますが、人生において「一日一笑」を心がけている人もいます。ともに今を、今日を大事に生きようとする思いに満ちています。

「一日一笑」（一日にたとえ一回でも家族みんなで大笑いする）――「笑い」の効用が遺伝子の世界においても、医療の世界においても見直されています。笑いの多い家には「うつ病」が寄り付かないとの報告もあるようです。「笑い」は共感する、受容することで生まれますので、人と人との心の「つながり」を実感し、孤独にならないので、「うつ」にかかりにくいのかもしれません。今月は、立正佼成会創立の月です。「人を救い、世を立て直す」という本会の創立の精神に立ち返り、会長先生は改めて「生活の場が道場」とのご法話を下さっています。そして、『本会の特徴は、ご法を習学し、日常生活に生かす――**「信仰即生活」**の姿勢にある』とご指導くださっています。なぜなら「一生涯をかけて教えを学び、実践する場」が他ならぬ私たち一人ひとりの「生活の場」であり、その場において「仏になる〈成仏＝人格完成〉」をめざすことが仏さまの教えの核心だからです。

さらに会長先生は、中国の思想家・王陽明の**「知行合一」**の教えにふれ、「仏道を歩むことも、実践がともなって初めて教えが生きる」と教えます。そこで大切なことは、「いま・ここ」の念（こころ）です。私たちは特別なことがあるときには本気になれますが、そうではなく、「いつでも目の前のことに真剣にとりくむ」ことをお勧めになっています。なぜか？それが明るい「未来」につながっているからです。

とは言っても、「言うは易し、行うは難し」です。だからこそ冒頭に申し上げた「一日一笑」の実践をお勧めします。一日一回家族で大笑いする。もし家族がそばにいない、そんなこと恥ずかしい、と思うなら、鏡に向かって一人で笑顔をつくる、声を出して笑ってみることから始めてもいいのです。「やればできる」のではなく「やるからできる」のです。

毎日読経のたびに唱える「道場観」は、いつでも、どんな環境にあっても『**「いま自分のいるところで全力を尽くしなさい」**という、私たちへの仏さまからの慈悲の呼びかけ』と信受し、豊かな、明るい人生を歩むために、勇気をもって一歩でも一緒に歩み始めましょう。

「見えないものの大切さ」と「感謝の中で生きること」を学ぶ

＝＝＝　近畿ブロック　カンボジア平和使節団　現地青年会員と交流

２月５日から９日まで、近畿ブロックの「第５回カンボジア平和使節団」（団長＝上田真佐江豊中教会長）が実施された。一行は１４人で、京都教会から２人の女子青年が参加した。

同使節団は毎年派遣されている。参加した各教会からの代表者が、「平和」や「いのちの尊さ」について考え、「一食を捧げる運動」の推進者となることを目的として実施している。

一行はポル・ポト政権時代の虐殺の様子を知る人の体験談を聴き、辛く悲しい出来事を我がことのように感じたという。そして、キリングフィールドと呼ばれる大量虐殺が行われた刑場跡で慰霊供養を行った。

そして、一食ユニセフ募金の支援事業である「子どもに優しい学校」づくりに取り組む小学校を訪問した。さらに、スナーダイクマエ孤児院を訪れた。

また、今回は初めて、現地の本会のカンボジア人青年会員と交流し、教えにふれた経緯や布教への願いなどを語り合い、国を越えた交流を通して、懇親を深めた。

京都教会から参加した高橋良枝さん（中央支部）は「ポルポト時代の強制収容所やキリングフィールドでは、今でも苦しみの残像が漂っていると感じました。ご供養の大切さをみんなでかみしめることができました。悲しく辛い時代を生き抜いた世代の子どもたちに教育の機会が必要だと痛感し、私たちが支援していくことが急務だと思いました。今回の体験を通じ、命のつながりを自覚し、子供たちの未来を願い行動することを心に刻ませました。『人の心から貪欲を去り、争わず、奪わず、咎めず、妬まない広やかで優しい心の持ち主をいっぱいにしていこう』と観じた旅でした」と述べている。

もう一人参加した岡田夏美さん（中央支部）も「トゥール＝スレン刑務所では、目に見えないもの（存在）が、共に在るのだということに気づかされました。それまでは、あまり縁といった目に見えないものを心から信じていなかったのですが、自分の力ではないものが事実在るのだと思うようになり、全てのことに素直に感謝の気持ちを持てるようになってきました。また、ご供養をあげることで、ご先祖様への感謝の気持ちを表すということ、さらには多くの御霊のためにもなるということに気づかされました」と述べていた。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《中国で核問題を語る》

天台山参拝を終えたあと、庭野開祖はすぐさま北京へ飛んだ。世界宗教者平和会議(WCRP)平和使節団の一行と合流するためであった。この平和使節団は、先のプリンストン会議での「核兵器保有国への先制使用禁止申し入れ」決議に基づく、核保有５ヶ国の首脳への会談申し入れの一環だった。各国委員会が５ヶ国に対して申し入れを行い、日本委員会も、中国大使館を通じて中国政府要人との会談を申し入れていた。それに中国政府が応じてくれて、平和使節団の訪中が実現したのであった。

会談の前夜、平和使節団のメンバーが、世界各国から北京のホテルに集合した。世界宗教者平和会議委員長のアンジェロ・フェルナンデス大司教、ディナ・グリーリー博士、事務総長のホーマー・ジャック博士、そして日本委員会の各メンバー。中国側は、政府代表として前副総理の姫鵬飛(き・ほうひ)国務委員をはじめ、国務院宗教事務局長、中国仏教協会会長の趙樸初師、といった人たちが顔を揃えた。

会談は終始なごやかに進み、姫鵬飛国務委員が「世界宗教者平和会議の平和使節団の皆さんは、何ヶ国を訪問される予定ですか」と問われる。「私たちは、核保有国であるアメリカ、ソ連、中国、フランス、イギリスへの訪問を希望し、会談の申し入れを行っております。それに対して、中国政府が最初の受け入れ国になって下さったことに感謝致します」と謝辞を述べた。

そして庭野開祖は、日本が最初に原爆の犠牲になった国であり、核兵器がもたらす地獄を目の当たりにした国であること、その不幸な体験をしたからこそ私たちは、**日本を最初で最後の原爆被爆国としなければならないという決意をもって、非核三原則を守っている**ことを伝え、日本の宗教者としての決意を話した。

「核兵器による戦争には勝者も敗者もありません。核兵器を持つ国の宗教者も、もたない国の宗教者も力を合わせて立ち上がることが必要です。世界宗教者平和会議は、そのために生まれた組織なのです」姫鵬飛国務委員は、大きくうなずかれた。

庭野開祖に続いてフェルナンデス大司教が、第２回国連軍縮特別総会にむけての、世界宗教者平和会議からの４項目の提案を発表した。「核兵器の使用は人類に対する犯罪であることの言明」「米ソ両国の核備蓄の凍結、核実験禁止条約締結の働きかけ」「国連による世界レベルの軍縮キャンペーン」「世界各国の軍事費を発展途上国への援助にふりむける働きかけ」姫鵬飛国務委員は、**「すばらしい要望です。一緒に努力してまいりましょう」**と言って立ち上がり、平和使節団の一人ひとりと握手をかわした。

《仏教倫理の原点》

庭野開祖は、その前年の春にも中国を訪れていた。「プリンストンでお世話になったご恩返しに、庭野先生をお招きしたい」という中国仏教協会の招きで、ご夫婦揃っての訪中だった。

文化大革命の嵐がようやくおさまって、案内された寺院では、そのときに受けた損害の修復に全力で取り組み、復興が着々と進んでいる様子だった。そして、庭野開祖が何よりもうれしかったのは、初めて会った宗教者のほとんどが世界宗教者平和会議について、よく知っていることだった。そして、趙樸初師からこんな要請があった。**「世界の宗教指導者が一つになって平和の運動を推進している世界宗教者平和会議の方法と、その根本の考え方について、中国の宗教者に話して頂きたいのです」。**

案内された北京市の講堂には、宗教者を中心に１５００人もの人たちが集まっていた。各宗教の指導者のほか、政府の各部門の代表、そして若い男女の宗教学院の学生たちの姿もあった。社会主義国の中国で宗教指導者の養成が行われるようになっていたのである。

その聴衆を前にして庭野開祖は、**「宗教者の協力によって世界平和が実現できるという私の信念は、中国から大乗仏教という貴重な宝を伝えてもらったことによっているのです」**とお礼を述べた。そして法華経の常不軽菩薩(じょうふきょうぼさつ)の礼拝行について話をした。「遠い遠い昔、会う人会う人に合掌して、**『あなたは仏になれる人です』**と礼拝し続ける比丘がおりました。どんな人も軽んじない人というので『常不軽』と呼ばれたのですが、常不軽は**すべての人が備えている仏性を疑うことがありませんでした。**

自分の仏性に気づかずに争いあい、傷つけあっている人たちに、本当の自分に気づいてもらいたい一念で人々を拝み続けたのです。　（つづく）

渉外部からのメッセージ

「今月の言葉」のコーナーでは、機関誌「佼成」の会長先生のご指導を、会員としてどのように実践していけばいいのか中村教会長から咀嚼して頂いています。先日、ある議員さんからその言葉に救われましたとご丁寧なお手紙を頂きました。編集部一同、実際に救われた喜びの声を直接頂けると大変励みにもなります。日々の暮らしや仕事の中で湧き出てくる悩み苦しみを、法に求める姿勢を教えて頂いたように思います。**この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266**